

大学生における座席位置と相互独立—協調的自己観の関係

豊田 弘司 奈良教育大学学校教育講座(心理学)
井上 紗智 奈良教育大学学校教員養成課程心理学専修卒業
多根井 重晴 奥羽大学薬学部

Relationship between Seating Position and the Independent and Interdependent Construal of Self in Undergraduates

Hiroshi TOYOTA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Sachi INOUE

(Graduated at Training Course of School Education, Nara University of Education)

Shigeharu TANEI

(Department of Pharmacy, Ohu University)

Abstract

The present study was carried out to examine the relationship between choice of seating position and independent and interdependent construal of self. Undergraduates were asked to choose a seat in 3 contexts: one of 12 seats located around the square desk in a party situation; one of 5 seats in front of the interviewers in an oral examination situation; and one of 5 seats arranged with 2 opposite the other 3 in a debate situation. Subscale scores for independent and interdependent construal of self were compared among participants who selected each seating position. In the party situation, although few participants chose the seat located at the top of the table, assertiveness subscale scores for those who did were higher than for those who chose the other 11 seating positions. There were no differences in scores according to the seat chosen in the oral examination situation. Participants who chose the seat on the right-hand side of the 3-seat row in the debate situation had lower assertiveness scores than those who chose another position. These results were interpreted as showing the possibility of assessing individual differences by focusing on seating position in some situations.

キーワード：座席位置

相互独立—協調的自己観,
パーソナル・スペース

Key Words: Seating Position

Independent and Interdependent con-
strual of self
Personal Space

1. 問題と目的

児童・生徒を取り巻く環境を整備することは重要な課題である。環境を整備するためには、児童・生徒に影響する環境の規定因を明確にする必要があるが、古くから教室における環境と児童・生徒の心理的特性の関係が検討されてきた。例えば、Dykman & Reis (1979) は、教室での座席位置と自己概念との関係を明らかにしてい

る。人間を取り巻く環境の中で主に物理的環境が人間の心理に及ぼす影響を検討した学問体系を環境心理学と呼ぶが、中でも重要なのが、空間的な位置関係である。日常生活において、我々は、自分以外の人との距離(空間)を意識しながら、うまく相手との関係を維持して生活を営んでいる。例えば、電車に乗ったとき、先に座っていた人の隣に座るのではなく、他者を避けるために1つ空けて座る。また、長い椅子のときは好んで端に座る

ことが多い。では、何故このような行動をとるのであるのか。それは、人間は、他者が侵入してくると不快感を抱く空間を持っているからであると考えられる。このような空間をパーソナル・スペース (Personal Space; 以下PS) と呼んでいる。本間 (2011) によれば、空間を媒介として人の行動を検討する学問体系をプロクセミクス (proxemics) と呼ぶが、その中心的概念がPSである。PSは、Sommer (1969) によって提唱された概念である。そこでは、もち運びのできるなわばり空間であり、他人の侵入を許容しない、個人を取り巻く見えない境界をもつ空間とされている。

Hall (1966) は、PSに関連して個体間の距離に注目し、密接距離 (45.7cm以下)、個人距離 (近接相: 45.7~76.2cm, 遠方相: 76.2~121.9cm)、社会的距離 (近接相: 121.9~213.4cm, 遠方相: 213.4~365.8cm)、公衆距離 (近接相: 365.8~762cm, 遠方相: 762cm以上) という4つの距離帯に分類し、それぞれが文化や民族、地位、環境などによって変化すると主張した。また、渋谷 (1974) は、PSは前方に広く、両側方から後方にかけては密である玉子型をしていると考えている。青野 (1979) は、PSと対応する対人距離に注目し、その性差を検討した結果、男性は女性よりも大きい対人距離をとることを明らかにしている。また、年齢によって同性同士の距離は直線的に増大するが、異性同士の距離は思春期前・思春期を頂点として、曲線的変化をたどることも示されている。さらに、PSと心理的特性との関係も検討されている。例えば、不安 (Leipold, 1963)、統制の位置 (Duke & Nowicki, 1972) 及び自己概念 (Frankel & Barrett, 1971; Stratton, Tekippe & Flick, 1973) 等がPSと関係することが知られている。

このように、PSに関連する研究がなされているが、その中で座席位置による行動をアツかう研究は、「座席行動 (座席選択を含む)」や「座席配置」の研究と呼ばれている。Cook (1970) によれば、座席選択は、視線、距離、動機づけの関係によって決まり、距離は親密度と関係があり、視線は状況によって親愛と敵意という異なる機能を持つ。具体的には、嫌いな相手に対しては距離を大きくとり、視線を避ける傾向がある。一方、親密な相手に対する距離は小さくなり、横並びの位置が選択されることになる。小俣 (1992) は、Cook (1970) と同じような様々な心理的状况での座席選択を検討した結果、親しい相手と同席する際には横並びの席、親しくない相手の場合には離れた席が主として選択され、それは状況には関わらないことが明らかにしている。これは、座席選択は相手との親密度に基づいて規定されることを示唆している。

座席選択と性格特性との関連性を示す研究もある。渋谷 (1986) は、YG性格検査で不安定消極型 (E型) の学生は、大きな講義室では最初に座席を大きく移動し、後に特定の空間の座席に固執することが示されている。ま

た、北川 (1980) は、教室の前列や左右中央列に座る学生はYG性格検査の安定積極型が多いことを明らかにしている。さらに、北川 (2003) は、教室の左右のゾーンに着席する者は、教員に対する心理的葛藤があること、教室の後方の座席選択をする学生は、授業に対する意欲が乏しいこと、前方の座席は授業に対して真面目に関わる学生及び教員との親密度が高い学生が選択すること等が明らかにされている。古い研究ではあるが、Hare & Bales (1963) は、性格特性の中でもリーダーシップとの関連を示した研究として有名である。そこでは、長方形の机の短い辺と長い辺の中央の席は討議の方向性を支配し、リーダーシップがとりやすい座席位置であることが示されている。

このような性格特性と座席選択との関係を規定する要因としては、他者との関係において自己をどのようにとらえるかという視点である自己観が考えられる。というのは、先に述べたPSが個人の空間的なわばりを規定しているが、そのPSは他者との関係をどのようにとらえているかによって変動する可能性があるからである。すなわち、他者との空間的關係や心理的關係がPSを規定し、そのPSが選択する座席を規定するのである。北山 (1994) は、ある文化において歴史的に共有された自己についての前提を文化的自己観と呼んでいる。この自己観はそれぞれの文化の中で生まれ、習慣、言語の用法、ルーティン化された社会的状況や行為、社会制度など文化そのものの性質を規定する。また、それは、日常にある社会的現実を構成しており、それぞれの文化の根底に流れている概念、観念、イメージ、ディスコースなどから成る混合物として存在していると述べている。

北山 (1994) は、文化の持つ心理的プロセスの構成機能を分析するために、自己についての文化的モデルを相互独立的自己観と相互協調的自己観に区分している。北山 (1994) によれば、相互独立的自己観とは、アメリカ合衆国をはじめとする西洋文化で優勢であり、自己とは他から切り離されたものという信念に基づいている。社会に認められるためには自分自身の中に誇るべき才能や能力などを見だし、それを外に表現することによって自己実現をはかり、それらの才能の存在を自分自身で確認することである。一方、相互協調的自己観とは、日本をはじめとする東洋文化で優勢であり、自己は他と根源的に結びついているという前提に立っている。社会に認められるためには、意味ある社会的関係に所属し、そのなかで相応の位置を占め、他と相互依存的・協調的な関係を持続することにより、自己の社会的存在を確認し、そうして自己実現をはかることである。このような北山による自己観は、他者との心理的な距離を反映し、その心理的な距離は実際の対人距離に反映すると考えられる。そして、その対人距離は、選択される座席の位置との関係

が予想できるが、その関係はまだ検討されていない。

そこで、本研究の目的は、仮想場面を設定し、5～12名の小集団のなかで選択された座席の位置と相互独立的-相互協調的自己観との関係を検討することである。なお、自己観の測定に関しては、高田(2000)によって開発された相互独立的-相互協調的自己観尺度を用いる。

2. 方法

2.1. 調査対象

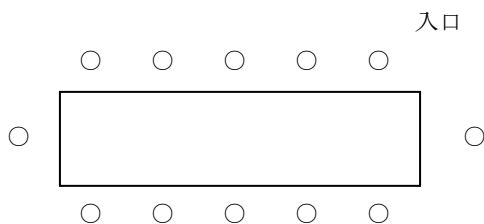
関西地区の国立大学の学生165名(男子61名, 女子104名)及び東北地方の私立大学の学生100名(男子40名, 女子60名)が調査に参加した。参加者の平均年齢は19.8歳であった。これらの参加者は、第1著者と第3著者の授業の受講生であり、調査の目的と、授業評価には一切関係ないこと、及び調査の参加は全く任意であることを説明された。

2.2. 調査内容

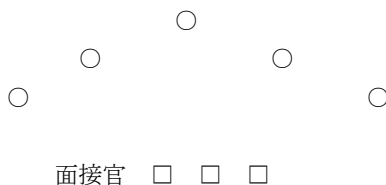
2.2.1. 仮想場面における座席の選択

3つの仮想場面(①同じ専修の12名の友人と夕食をとるとき、②採用試験で初対面の人と集団面接をするとき、③セミナーで初対面の人とグループ討論をするとき)を設定し、各場面で自分が座る位置を選択させた。以下に、実際に用いた調査内容を示している。

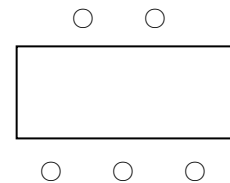
1) あなたは、同じ専修の友達12名で、夕食をするためにある店にきました。座席は自由に選ぶことができます。さて、あなたは、どの席に座りますか？



2) あなたは、採用試験ではじめて会った人たち4名と、集団で面接を受けることになりました。自由に座席を選ぶことができます。さて、あなたは、どの座席に座りますか？



3) あなたは、ある教職に関するセミナーに参加し、はじめて会った人たち4名と、話し合っ、一つの結論を出すように指示されました。さて、あなたは、どの座席に座りますか？



2.2.2. 相互独立的-相互協調的自己観尺度

高田(2000)によって開発された青年・成人用の尺度を用いた。この尺度は、個の認識・主張(他者とは異なった存在としての自分を認識する傾向。項目例「常に自分自身の意見を持つようにしている。」)、他者への親和・順応(他者との同化を重んじる認識の傾向。項目例「仲間の中で和を維持することは大切だと思う。」)、独断性(他者に配慮を払うことなく自分の判断に基づいて行動する傾向。項目例「一番最良の決断は自分自身で考えたものであると思う。」)、評価懸念(他者の眼差しや評価を気にする行動の傾向。項目例「人が自分をどう思っているかを気にする。」)という4つの下位領域からなり、個の認識・主張及び評価懸念が各4項目、他者への親和・順応及び独断性が各6項目の合計20項目から構成されている。各項目に対する評定尺度は「全くあてはまらない(1)」「あてはまらない(2)」「あまりあてはまらない(3)」「どちらともいえない(4)」「ややあてはまる(5)」「あてはまる(6)」「ぴったりとあてはまる(7)」の7段階尺度を用いている。

2.3. 調査手続き

第1及び第3著者の授業において、参加者の了承を得た上で、上述した「仮想場面における座席の選択」及び「相互独立的-相互協調的自己観尺度」をそれぞれA4用紙に印刷したものを配布し、集団で実施した。調査者(第1及び第3著者)が教示を与え、各項目を読み上げて調査を行った。調査終了後、提出に賛同してくれた参加者が調査用紙を提出した。

3. 結果と考察

3.1. 「同じ専修の12名の友人と夕食をとるとき」における座席選択と自己観

Fig.1に示した座席番号を選択した者の数及びその座席に対応する相互独立的-相互協調的自己観の各尺度得点の平均(M)とSDが、Table 1に示されている。

Table 1 選択座席ごとの各自己観尺度得点 (仮想場面①)

座席 番号	選択数 男 女 計		相互独立的-相互協調的自己観											
			個の認識・主張			他者への親和・順応			独断性			評価懸念		
			男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
1	11 17 28	M SD	14.82 4.05	14.12 5.66	14.39 5.01	30.82 6.81	31.88 3.46	31.46 4.96	20.73 6.72	22.53 5.85	21.82 6.15	19.36 4.78	22.24 4.16	21.11 4.56
2	8 17 25	M SD	17.75 4.92	17.12 3.37	17.32 3.84	32.13 3.52	30.18 4.56	30.80 4.28	23.75 2.96	24.94 3.77	24.56 3.51	20.63 3.74	20.00 3.66	20.20 3.62
3	3 5 8	M SD	17.67 4.16	16.60 4.83	17.00 4.31	30.67 4.16	31.20 6.98	31.00 5.73	26.00 3.00	23.60 4.04	24.50 3.66	21.00 2.65	19.60 6.66	20.13 5.28
4	5 8 13	M SD	18.40 1.34	18.63 3.93	18.54 3.10	28.00 2.23	31.88 2.17	30.38 2.87	25.40 5.94	28.13 6.24	27.08 6.03	20.80 3.19	19.13 7.04	19.77 5.75
5	12 17 29	M SD	16.58 5.14	15.24 5.29	15.79 5.18	29.25 7.28	30.76 5.11	30.14 6.02	24.92 7.32	25.12 5.36	25.03 6.12	18.83 7.66	18.82 5.22	18.83 6.22
6	11 2 13	M SD	18.73 4.90	16.50 3.54	18.38 4.66	32.36 4.80	33.00 7.07	32.46 4.84	26.18 9.03	31.00 0.00	26.92 8.44	17.82 6.05	21.00 4.24	18.31 5.78
7	9 13 22	M SD	16.00 5.34	14.69 4.05	15.23 4.55	29.67 4.24	30.46 5.33	30.14 4.82	26.26 2.70	24.46 5.47	25.32 4.58	14.78 3.93	19.85 4.14	17.77 4.71
8	7 10 17	M SD	16.71 2.29	15.50 3.44	16.00 3.00	29.14 4.71	30.20 1.93	29.76 3.27	25.00 9.02	25.80 6.51	25.47 7.38	18.14 2.54	20.60 4.12	19.59 3.68
9	4 5 9	M SD	19.25 3.77	19.80 3.03	19.56 3.17	31.00 4.24	28.20 2.17	29.44 3.36	22.50 6.14	28.40 3.44	25.78 5.45	20.50 2.51	20.20 3.56	20.33 2.96
10	8 30 38	M SD	19.25 2.25	17.03 3.63	17.50 3.49	28.75 3.69	30.63 4.02	30.24 3.98	28.13 4.32	25.20 5.07	25.82 5.02	18.88 2.64	18.70 4.20	18.74 3.90
11	21 36 57	M SD	18.43 4.04	16.42 4.84	17.16 4.63	30.05 5.98	31.39 4.20	30.89 4.92	26.90 6.31	24.33 6.25	25.28 6.34	19.24 5.71	19.53 4.87	19.42 5.14
12	2 3 5	M SD	17.00 4.24	19.00 4.36	18.20 3.90	31.50 9.19	31.00 6.08	31.20 6.30	33.00 9.90	36.67 6.66	35.20 7.12	18.50 4.95	18.67 3.51	18.60 3.51



Fig.1 データ整理のための座席番号 (仮想場面①)

3. 1. 1. 座席ごとの選択数

座席選択数に関しては、テーブルのセンターに位置する座席 (3, 6, 9, 12) を選択する者が少ないことがわかる。中心的座席に座ることは、他者からの注目が集まり、集団の話題の中心になることを意味する。それ故、集団の話題の中心になるのを避ける傾向があるといえよう。また、PSの視点からすれば、3及び9の座席は両方からPSに人が入ることになるので、避ける傾向が生じる可能性

が高い。一方、6及び12の座席は両方にスペースが確保できることになり、PSの確保からすれば、選択される可能性が高いが、上述したように、全員からの視線が集まりやすいために敬遠される傾向があるのであろう。

反対に、座席11の選択数が多い(全体の選択数の21.59%)。入口というPSを侵害される場所から遠く、周りからの注目も集めないという点で選択された可能性がある。座席10についても選択数が多く(全体の14.39%)、この座席についても座席11とほぼ同様の理由で選択された可能性がうかがえる。本研究では、選択理由を参加者に尋ねていないが、今後の研究においてその理由を尋ね、上記の可能性を確認することが課題である。選択された座席ごとの自己観に関する下位尺度ごとの得点を比較するために、12の座席配置を参加者間要因とする1要因の分散分析を下位尺度得点ごとに行った。性の要因を組み入れなかったのは、Table 1に選択数を見ればわかるように、座席によっては男女それぞれの選択数が少ないことによる。

Table 2 選択座席ごとの各自己観尺度得点 (仮想場面②)

座席番号	選択数 男 女 計		相互独立的-相互協調的自己観											
			個の認識・主張			他者への親和・順応			独断性			評価懸念		
			男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
1	8 11 19	M	17.63	19.27	18.58	33.00	28.73	30.53	27.88	29.27	28.68	19.25	17.18	18.05
		SD	4.87	5.20	4.99	1.77	5.53	4.79	5.67	7.91	6.91	3.37	6.35	5.29
2	23 57 80	M	17.22	16.40	16.64	29.91	30.54	30.36	26.74	23.54	24.46	19.17	20.07	19.81
		SD	4.46	4.18	4.25	4.89	3.31	3.81	7.31	4.97	5.88	4.94	4.11	4.35
3	21 29 50	M	18.48	17.62	17.98	30.86	29.38	30.00	24.62	27.79	26.46	17.62	18.14	17.92
		SD	5.19	3.22	4.14	6.29	4.58	5.35	6.39	5.38	5.98	6.13	5.19	5.55
4	39 55 94	M	17.05	15.38	16.04	29.46	31.91	30.89	24.13	24.64	24.43	18.85	20.20	19.64
		SD	3.63	4.68	4.34	5.00	4.16	4.66	5.73	5.22	5.41	4.67	4.21	4.43
5	10 11 21	M	17.80	14.09	15.86	30.50	33.82	32.24	27.40	24.91	26.10	20.10	22.36	21.29
		SD	3.39	5.07	4.65	6.77	3.97	5.60	8.38	6.91	7.56	5.70	3.38	4.66

3.1.2. 個の認識・主張

分散分析の結果、座席配置の主効果 ($F_{(11, 252)} = 2.16, p < .05$) が有意であったが、Scheffe法による多重比較を行ったところ、どの座席配置間にも個の認識・主張得点における有意差はなかった。したがって、選択された座席による個の認識・主張得点には違いのないことが明らかになった。

3.1.3. 他者への親和・順応

分散分析の結果、座席配置の主効果は有意でなく ($F_{(11, 252)} = .47$)、選択された座席による他者への親和・順応得点に違いのないことが明らかになった。

3.1.3. 独断性

分散分析の結果、座席配置の主効果 ($F_{(11, 252)} = 2.47, p < .01$) が有意であった。Scheffe法による多重比較を行ったところ、座席12を選択した者が座席1を選択した者よりも独断性得点が有意に高いことが示されたが ($p < .05$)、その他の座席間には有意差はなかった。座席12を選択した者の数が少ないが、この座席を選択する者は、相対的に独断性得点の高い可能性が示唆された。今後はさらにデータ数を増やして検討をする必要がある。ただし、渋谷(1990)によれば、Hare & Bales(1963)は、大きな角テーブルの短い辺(本研究でいえば、座席12及び6に対応)に座る者は、課題の解決を最優先するリーダーシップをとりやすいことが指摘されている。本研究で用いた仮想場面①は食事場面であるので、課題解決場面ではないが、自分がリーダーシップを取り、話題を決定していくという意味では、独断性が高いことを反映しているといえよう。また、Sommer(1967)では、PSが狭い者は協調性が高いので、PSを広く確保できるこの席を選ぶ者は協調性と対比的な独断性が高いのであろう。

3.1.5. 評価懸念

分散分析の結果、座席配置の主効果は有意でなく ($F_{(11, 252)} = .86$)、選択された座席による評価懸念得点に違いのないことが明らかになった。

以上のように、この面接場面においては座席位置と自己観との関係は見いだせなかった。しかし、参加者が面接官に対して、右視野になるか左視野になるかによって、活性化する大脳半球が異なることが知られている。例えば、柏原・一谷(1986)は、男性は抽象語の定義や単語の想起の処理をする場合、大脳の左半球後部で α 波が高くなることを見いだしている。また、河合(1980)は、文章課題において、右視野を使う方が左視野よりも成績が良いことが示されている。それ故、無意識に視線を右にする傾向があるため、左側に座る傾向があるのではないかと考えた。

さらに、大里(2005)によれば、座席1や5であれば、面接官からの視線量が減り、その結果、不安緊張や自己防衛が軽減される可能性がある。このような先行研究から座席位置による違いがあると予想したが、その予想は支持されなかったのである。

3.2. 「採用試験で初対面の人と集団面接をするとき」における座席選択と自己観

Fig.2に示した座席番号の選択数及びその座席に対応する相互独立的-相互協調的自己観の各尺度得点のMとSDが、Table 2に示されている。

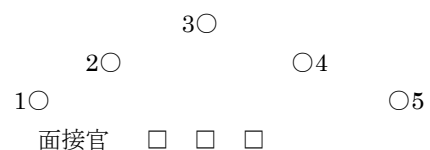


Fig.2 データ整理のための座席番号 (仮想場面②)

Table 3 選択座席ごとの各自己観尺度得点 (仮想場面③)

座席 番号	選択数 男 女 計		相互独立的-相互協調的自己観											
			個の認識・主張			他者への親和・順応			独断性			評価懸念		
			男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体	男	女	全体
1	27 48 75	<i>M</i> <i>SD</i>	17.74 3.29	18.10 4.36	17.93 3.99	31.33 4.61	29.52 4.33	30.17 4.49	26.07 5.86	27.23 6.22	26.81 6.08	19.85 3.75	18.79 5.50	19.17 4.94
2	18 45 63	<i>M</i> <i>SD</i>	17.00 5.27	16.64 4.32	16.75 4.57	30.83 5.85	30.49 4.83	30.59 5.10	26.50 6.48	25.27 5.00	25.62 5.44	17.67 6.45	19.78 4.56	19.17 5.20
3	23 21 44	<i>M</i> <i>SD</i>	15.96 4.32	13.67 3.97	14.86 4.27	29.39 5.88	32.29 3.93	30.77 5.20	21.83 6.37	22.48 5.53	22.14 5.92	19.26 4.31	20.95 3.56	20.07 4.01
4	14 11 25	<i>M</i> <i>SD</i>	20.57 2.68	16.09 3.53	18.60 3.77	31.50 3.37	31.28 2.49	31.40 2.99	27.79 7.64	25.00 2.45	26.56 6.01	18.79 6.38	18.36 4.30	18.60 5.45
5	19 38 57	<i>M</i> <i>SD</i>	17.26 4.27	15.18 4.41	15.88 4.44	28.21 5.77	32.24 3.23	30.89 4.61	26.21 5.89	23.89 5.95	24.67 5.98	17.95 5.04	20.58 3.76	19.70 4.37

3.2.1. 座席ごとの選択数

選択数は、両端の座席選択が他の座席選択よりも少ないことが明らかになった。両端に関しては、面接官との距離があるので、自分をアピールしにくい座席であるという理由によって選択が抑制された可能性がある。しかし、ちょうど中心の3の座席に関しては、2や4の座席よりも選択数が少ない。したがって、あまりに中心になっても自分に注目が集まりすぎる懸念があり、それが抑制的に働いているのかもしれない。

3.2.2. 個の認識・主張

男女ともに各座席選択数が10以上であったので、個の認識・主張得点に関して、性×座席配置の2要因分散分析を行った。その結果、性の主効果 ($F_{(1, 254)} = 2.64$)、座席配置の主効果 ($F_{(4, 254)} = 2.30$) 及び性×座席配置の交互作用 ($F_{(4, 254)} = 1.07$) はいずれも有意でなかった。したがって、座席配置によって個の認識・主張得点には男女ともに差がないことが明らかになったのである。

3.2.3. 他者への親和・順応

他者の親和・順応得点に関して性×座席配置の2要因分散分析を行った結果、性の主効果 ($F_{(1, 254)} = .03$) 及び座席配置の主効果 ($F_{(4, 254)} = .88$) は有意でなかった。性×座席配置の交互作用 ($F_{(4, 254)} = 3.33, p < .05$) は有意であったが、多重比較によって有意差は検出されず、座席配置によって他者の認識・順応得点には男女ともに差がないことが示された。

3.2.4. 独断性

独断性得点に関して性×座席配置の2要因分散分析を行った結果、性の主効果 ($F_{(1, 254)} = .02$) 及び座席配置の主効果 ($F_{(4, 254)} = 2.36$) は有意でなかった。性×座席配置

の交互作用 ($F_{(4, 254)} = 2.41, p < .05$) は有意であったが、多重比較によって有意差は検出されず、座席配置によって独断性得点には男女ともに差がないことが示された。

3.2.5. 評価懸念

評価懸念得点に関して性×座席配置の2要因分散分析を行った結果、性の主効果 ($F_{(1, 254)} = .66$)、座席配置の主効果 ($F_{(4, 254)} = 2.35$) 及び性×座席配置の交互作用 ($F_{(4, 254)} = .64$) はいずれも有意でなかった。したがって、座席配置によって評価懸念得点には男女ともに差がないことが示されたのである。

3.3. 「セミナーで初対面の人とグループ討論をするとき」における座席選択と自己観

Fig.3に示した座席番号の選択数及びその座席に対応する相互独立的-相互協調的自己観の各尺度得点のMとSDが、Table 3に示されている。

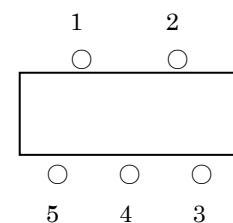


Fig.3 データ整理のための座席番号 (仮想場面③)

3.3.1. 座席ごとの選択数

3席の列の中心の座席 (座席4) の選択数が少なく、両端を囲まれるという位置はPSを侵害されるという認識のために、敬遠される傾向があるのかもしれない。

3.3.2. 個の認識・主張

個の認識・主張得点に関して、性×座席配置の2要因分散分析を行った。その結果、性の主効果 ($F_{(1, 254)} = 9.51, p < .01$) 及び座席配置の主効果 ($F_{(4, 254)} = 4.78, p < .001$) が有意であった。座席配置の主効果についてScheffe法による多重比較を行った結果、座席3が座席1及び座席4よりも得点が低かった(それぞれ、 $p < .01, p < .05$)。ただし、性×座席配置の交互作用 ($F_{(4, 254)} = 1.99$) は有意でなかった。したがって、3席の列の右端座席を選択する者は、他の座席を選択する者と比較して、個の認識・主張が少ないことがうかがえる。

3.3.3. 他者への親和・順応

他者の親和・順応得点に関して性×座席配置の2要因分散分析を行った結果、性の主効果 ($F_{(1, 254)} = 2.11$) 及び座席配置の主効果 ($F_{(4, 254)} = .33$) は有意でなかった。性×座席配置の交互作用 ($F_{(4, 254)} = 3.84, p < .01$) は有意であったが、多重比較によって有意差は検出されず、座席配置によって他者の認識・順応得点には男女ともに差がないことが示された。

3.3.4. 独断性

独断性得点に関して性×座席配置の2要因分散分析を行った結果、性の主効果 ($F_{(1, 254)} = 1.27$) 及び性×座席配置の交互作用 ($F_{(4, 254)} = 1.03$) は有意でなかったが、座席配置の主効果 ($F_{(4, 254)} = 4.42, p < .01$) は有意であった。この主効果について多重比較を行ったところ、座席3が座席1及び座席4よりも独断性得点の低いことが示された。Fig.3の左端は上座と想定されるので、座席3は下座にあたる。それ故、自分が積極的に主導権をとるという姿勢が弱く、それに対応して独断性が低いといえよう。この結果は、先にのべた個の認識・主張の結果と同じく、これまでの先行研究からは予想できないことであった。渋谷(1990)によれば、Howell & Becker(1962)は、本研究と同じような場面を実際に設定し、その場面での座席に座るかによって、議論のリーダーシップをとる可能性を検討している。その結果、2つの座席のいずれかに座った者が、3つの座席のいずれかに座った者よりもリーダーシップをとる可能性が2倍以上であった。ここでのリーダーシップをとる可能性は、参加者に「誰が討論のリーダーになったと思うか?」という質問に対する答を指標としている。なお、やや詳細になるが、Howell & Becker(1962)の実験場面では、3つの席が机の両側に配置されていて、そこに5人が参加者として案内され、自由に座席を選択するという設定である。

リーダーシップと個の認識・主張及び独断性とはやや異なるが、本研究で明らかになったことは、座席3を選択した者の個の認識・主張や独断性が低いということである。

ある。Howell & Becker(1962)では、座席3は、3つの座席のうちの一つであるので、リーダーシップをとる可能性が低い。リーダーシップの要素として、個の認・主張や独断性を含めるならば、座席3は3つの座席のうちの一つであるので、Howell & Becker(1962)の結果とは一致する方向性をもつことになる。しかし、座席1及び2を選択した者と座席4及び5を選択した者の個の認識・主張及び独断性には差がないので、2つの席のうちのいずれかを選択した者と、3つの席のいずれかを選択した者との差は明確ではない。ただし、3つの座席のうちの末席にあたる座席選択者の個の認識・主張及び独断性が低いことは新しい発見であり、注目すべき結果であろう。

3.3.5. 評価懸念

評価懸念得点に関して性×座席配置の2要因分散分析を行った結果、性の主効果 ($F_{(1, 254)} = 2.31$)、座席配置の主効果 ($F_{(4, 254)} = .64$) 及び性×座席配置の交互作用 ($F_{(4, 254)} = 1.55$) がいずれも有意でなかった。この結果は、選択された座席によって、評価懸念は異ならないことが明らかになったのである。これまでの分析においても、評価懸念に関しては、座席位置との関係が見いだせなかった。鈴木・長江(2012)によれば、青年期はまだ自我同一性が確立していないので、評価懸念や賞賛欲求が強く、表面的な友人関係を求めるタイプがいるとされている。したがって、評価懸念が高い者は、座席位置も他者との距離を近づける方略をとるので、座席位置への影響が予想されたが、その予想は支持されなかった。

また、本研究の目的ではないが、性差が見いだされている。竹尾(1999)では、相互独立的-相互協調的自己観において、男子が女子よりも相互独立的であることを示しているが、本研究においてもその傾向が認められている。

4. 結論と今後の課題

本研究は、長方形卓を使用した際の仮想場面における座席選択によって相互独立的-相互協調的自己観尺度の独断性に違いを明らかにした。すなわち、1)長方形卓の短い辺の一人席、長い辺に5人席を配置する場面において、上座の短い辺の一人席を選択する者は少数であるが、その独断性得点は高い。2)長方形卓に2人席と3人席を配置された場面において、3人席の末席にあたる端の席を選択した者は個の認識・主張及び独断性得点が低い。高田(2011)によれば、本研究で用いた相互独立的-相互協調的自己観尺度に関しては、発達的な違いが指摘されている。それ故、調査対象の違いによって座席位置との関係も異なる可能性があるといえよう。

本研究は、仮想場面を用いているが、これまでの座

席位置に関する研究(例えば, Howell & Becker, 1962)は, 実際に座席に座らせるような実験の手続きを用いている。実験の手続きの方が実際の場面に近いので妥当性があるとは考えられるが, 実験の手続きを用いた場合には, その実験上の制約等があり, 実施が困難な場合がある。それ故, 本研究では仮想場面を用いた検討を行ったが, 上記のような座席位置と独断性の関係を明らかにすることができた。今後は, 独断性以外の個人差特徴と座席位置との関係を検討していく必要があるといえよう。

引用文献

- 青野篤子 1979 対人距離に関する発達の研究 実験社会心理学研究, 19, 97-105.
- Cook, M. 1970 Experiments on orientation and proxemics. *Human Relations*, 23, 61-76.
- Duke, M. P., & Nowicki, S., Jr. 1972 A new measure and social-learning model for interpersonal distance. *Journal of Experimental Research in Personality*, 6, 119-132.
- Dykman, B. M. & Reis, H. T. 1979 Personality correlates of classroom seating position. *Journal of Educational Psychology*, 71, 346-354.
- Frankel, A. S., & Barrett, J. 1971 Variations in personal space as a function of authoritarianism, self-esteem, and racial characteristics of a stimulus situation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 37, 95-98.
- Hall, E. T. 1966 *The hidden dimension*. New York: Doubleday & Company, Inc. (日高敏隆・佐藤信行(訳)1971 *かくれた次元* みすず書房)
- Hare, A. P. & Bales, R. F. 1963 Seating position and small group interaction. *Sociometry*, 480-486.
- Howells, L. & Becker, S. 1962 Seating arrangement and leadership emergence. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 148-150.
- 本間道子 2011 パーソナルスペース「キーワードコレクション 社会心理学」二宮克美・子安増生(編)新曜社 176-179.
- 柏原恵龍・一谷 彊 1986 アルファ波の左右差における性差の検討 日本教育心理学会総会発表論文集, 28, 880-881.
- 河合優年 1980 言語負荷課題が視空間認知の左右非対称性に及ぼす効果 心理学研究, 50, 310-317.
- 北山 忍 1994 文化的自己観と心理のプロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- 北山 忍・唐沢真弓 1995 自己:文化心理学的視座 実験社会心理学研究, 35 (2), 133-153
- 北川歳昭 1980 座席行動の研究(Ⅱ):教室内の座席行動と性格特性 中国短期大学紀要, 11, 32-45.
- 北川歳昭 2003 教室空間における着席位置の意味 風間書房
- Leipold, W. E. 1963 Psychological distance in a dyadic interview as a function of introversion-extroversion, anxiety, social desirability, and stress. Unpublished doctoral dissertation. University of North Dakota. (Dykman & Reis, 1979による) .
- 小俣謙二 1992 日本人学生の座席選択にみられる特徴 名古屋文理短期大学紀要, 17, 9-16.
- 大里栄子 2005 対人コミュニケーションと個人空間 福岡国際大学紀要, 13, 21-27.
- Stratton, L. O., Tekippe, D. J., & Flick, G. L. 1973 Personal space and self-concept. *Sociometry*, 36, 424-429.
- 鈴木真美子・長江美代子 2012 大学生の友人関係のありかたとアイデンティティの発達 日本赤十字豊田看護大学紀要, 7, 133-144.
- 渋谷昌三 1975 『人の空間行動』 学習院大学哲学会誌, 3, 88-112.
- 渋谷昌三 1986 教室のプロセミックス—座席位置の分析—山梨医大紀要, 3, 40-49.
- 渋谷昌三 1990 NHKブックス『人と人との快適距離 パーソナル・スペースとは何か』日本放送出版協会
- Sommer, R. 1967 Small group ecology. *Psychological Bulletin*, 67, 145-152.
- 高田利武 2000 相互独立的—相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, 8, 145-163.
- 高田利武 2011 相互独立性・相互協調性の発達の変化: 青年期を中心とした縦断的検討 発達心理学研究, 22, 149-156.
- 竹尾和子 1999 自己の性差に関する状況理論からの検討: 相互独立的・相互協調的自己観における性差 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 694.